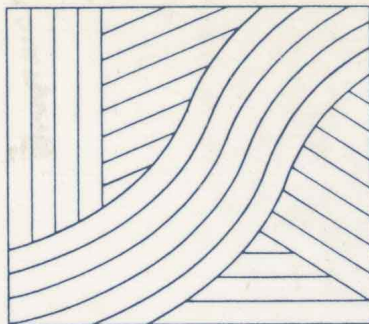


年報
'99

14



川端文学への 視界

川端文学
研究会編

■ 川端香男里／長谷川 泉／川俣従道——○

■ 中村三春／高比良直美／崔 順愛／吉田秀樹——○

■ 保昌正夫——○

■ 田村嘉勝／戸谷庄一／風間俊宣——○

■ 川俣従道／清水總明／松本 潔——○

■ 清水千寿子／佐藤秀子／山口秀夫——○

■ 深澤晴美——○

■ 三田英彬／岩田光子／網野義紘——○

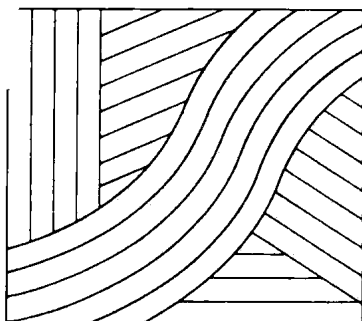
■ 藤田尚子／平山三男——○

■ 山田吉郎／十重田裕一／張 石——○

■ 野末 明／奥村紀美／高根沢紀子／田村嘉勝——○

年報
'99

14



川端文学への
視界

川端文学
研究会編

The Society of Kawabata Literature

川端文学への視界 川端文学研究1999

1999年6月10日初版発行

●
編 者 川端文学研究会

会長 長谷川 泉

●
発行人 柴崎 聡

●
発行所 (株)教育出版センター

〒170-0004 東京都豊島区北大塚3-29-2

TEL. 03-3917-8930

FAX. 03-5394-0633

●
編集・制作 (株)銀の鈴社

発 売 (株) 冬至書房 ア

印刷所 電算印刷(株)

●
定価：本体2500円＋税

ISBN4-7632-1565-5 C3095 ¥2500E

●
乱丁・落丁本はお取替いたします。

1999 © Kawabata Bungaku Kenkyukai
Printed in Japan

川端文学への視界
'99

目次

「百年」への思い……………川端香男里 7

創立25周年記念の特別大会……………長谷川 泉 10

詩「鬼無里をたたえる」に寄せて……………川俣 従道 12

●論文

逃走するエクリチュール

——『上海』『浅草紅団』のフラグメント性——

……………中村 三春 13

川端康成と今東光

——生い立ちそして、『新思潮』から『文藝時代』まで——

……………高比良直美 26

川端康成『古都』論

——『古都』の異国情緒……………崔 順愛 42

齟齬する視座

——大江の川端批判をめぐる……………吉田 秀樹 58

●講演（要旨）

「横光利一——その死の前後」から……………保昌 正夫	72
----------------------------	----

●鬼無里特集

創立25周年記念特別大会スケジュール……………	77
鬼無里村で特別大会を開催する趣旨……………	78
「牧歌」引用資料の虚構化か？……………田村 嘉勝	79
川端文学研究会特別大会開催にあたって……………戸谷 庄一	81
川端文学研究会特別大会開催経緯について……………風間 俊宣	82
川端の鬼無里訪問と内裏屋敷伝承について……………川俣 従道	83
鬼無里村の川端文学碑について……………清水 總明	86
戸隠の川端文学碑……………松本 潔	88
川端文学研究会特別大会に参加して……………清水千寿子	90
川端文学研究会特別大会に参加して……………佐藤 秀子	92

川端文学との縁に大きな誇り……………山口 秀夫 94

●資料

新資料・「文学界賞」関係全集未収録文四篇……………深澤 晴美 95

●書評

編集／長谷川 泉・平山三男

「国文学解釈と鑑賞」別冊「川端康成『雪国』60周年」……………三田 英彬 99

羽鳥徹哉・原 善著

『川端康成 全作品研究事典』……………岩田 光子 100

長谷川 泉著

『川端康成燦遺映』……………網野 義紘 102

『川端康成 往復書簡』……………藤田 尚子 104

猪瀬直樹著

『マガジン青春譜』……………平山 三男 105

研究展望

国内	川端康成	山田 吉郎	107
	横光利一	十重田裕一	116
国外	中国における川端康成研究・翻訳状況(一九九八年)		
	張 石		123
	野末 明		126
	川端康成没後新聞記事目録		
	奥村紀美 編		130
	川端康成没後年譜		
	高根沢紀子		133
	川端康成関係行事、刊行一覧(一九九八年)		
	生誕一〇〇年記念行事一覧		135
	研究文献目録(一九九六年)	田村 嘉勝	137
	研究会記録	川端文学研究会事務局	149

編集後記

山田 吉郎

150

— 会 報 —	
投稿規定	125
入会案内	115
例会予定	9
役員一覧	80
年報定期購読案内	76

「百年」への思い

川端 香男里

生誕百年を祝うということは元来西欧から伝来した習いであろう。ユネスコを中心に作家、芸術家の「アニヴァーサリー」が繰り広げられていることから、このことはよく分かる。もともとラテン語起源のアニヴァーサリーなる言葉は「毎年巡って来る」、つまり例年の、の意味であり、それが周年、記念祭の意味に用いられるようになったものであるらしい。

百貨店のような巨大資本のバックアップで文学展が華やかに全国各地で開かれたということは、今にして思えばバブル時代のみが可能にしたことだったかもしれない。

ノーベル文学賞受賞後、全国展開したこの種の展覧会のテープカットで「巡業」した思い出が忘れられない未亡人、つまりわが義母は百周年を心待ちにしていた。すでに満九十二となった義母には巡業など健康の面でもかなわぬことだが、ごく普通に考えて夫の生誕百年を生き延び迎えられるということは滅多にないことで、そのこと自体すでに大変めでたいことであると私は思っている。

作家の家族は、川端康成自身も常々言っていたが、裏方に徹すべきである。文学研究者のはしくれである私自身も常に裏方であることを心掛けてきたつもりである。

それゆえ私は作家の生の資料の保管者（遺言ですべて破棄するようにと命じられているのだが）、読者、研究者へのその資料の忠実な伝達者、ということに自分を限定して来た。だから私の言はすべて裏方の弁である。

作家の研究には色々な「材料」が必要である。伝記的研究はアメリカのニュークリティシズムのようなビュリタンの考え方だと「非本質的」文学研究の最たるものとされてしまうが、伝記はそれ自体がすぐれた文学ジャンルであり得るだけではなく、作家研究の重要な「材料」ともなる。ただ材料として伝記を利用する場合に心すべきは、そこで用いられている「伝聞」的要素の信憑度の評価である。駒子伝説やサユリスト伝説、あるいは三島をめぐる風聞のような伝聞のかたまりのようなものをもとにとりあげる研究者はいまいが、裏方から見るとどうしてこういう伝聞がまかり通るのかと不思議に思われることが多い。

例えば吉永小百合が高橋英樹と共演した『伊豆の踊子』のロケにやって来た川端康成が、ひたすら主演女優の顔を見て他に何もしなかったという話は、どうやら「確立

された」サユリスト伝説であるらしい。断っておくが駒子伝説にしろ何にしろ、家族にとって不快であることは何もない。要するにそれらしく面白いので、世間でそう思っているも少しも問題はない。ただ他でも書いたことだが、『伊豆の踊子』のロケのケースでは私の手元に物的証拠やはっきりした証言があるので、裏方の記録として書いておく。新潮社のグラビアの取材で行ったもので、女優を見たい一心で行ったわけではない。『新潮』編集長の丸山氏が同行した。グラビアを撮影した新潮社写真部員が私の友人であり、またこの取材にはわが老妻もついて行って、その一部始終を収めたアルバムが私の手元にある。

だからといって伝説が間違っているというような野暮なことを言う積もりはない。伝説にはなにがしかの真実、それも本質的な真実があることもある。ただ「材料」として使う場合に意識的にはっきりと区別すべきであるということとは言っておきたい。

個別の作家研究はえてして「蛸壺」的になりやすい。それを避けるには色々といふ幾何で言う「補助線」を引く必

要がある。それはある場合は他の作家であつたり、同時代の社会的文化的背景だつたりする。川端研究の場合、横光との対比は最も重要な補助線となるだろう。外国文学研究をもつばら飯の種としている裏方として私が考えている補助線は同時代の外国作家である。ヘミングウェイなど横光似であり比較されることはないが、重要な補助線である。それより面白いと思うのは、奇しくも今年生誕百年を迎えたナボコフである。同時代のこのような作家を東西にわたつて論じ検証することができたらすばらしいだろうなとひとり夢想しているが、私の手にはあまる課題である。若手研究者の中からこういう領域に挑戦する人が出てきてくれたらと願っている。

平成二一年度例会大会予定

特別大会

平成二一年六月二二―二四日

発表者 川端香男里氏 鈴木邦彦氏 曾根博義氏 他
於・静岡県天城湯ヶ島町

第二一四回例会

平成二一年八月二一日

第二一五回例会

平成二一年一〇月一六日

発表者 木村幸雄氏 他

第二一六回例会

平成二一年一二月四日

年報合評会 他

会場・発表者は予定です。

発表希望者は事務局までお問い合わせ・お申込み下さい。

創立25周年記念の特別大会

川端文学研究会が、創立25周年記念の特別大会を信州の鬼無里村でおこなったのには、次のような特別の理由がある。

〔川端康成が日本人最初のノーベル文学賞を得たわけであるが、そのノーベル文学賞と深くかかわる文学碑が、鬼無里村にある。川端文学碑は、全国各地にあるが、上記のような文学碑は、鬼無里村を除いては、他に無い。研究発表も、特別講演（佐伯彰一氏）もおこなわれ、一応の成果を得たと思っている。私は「牧歌」論で、新しいことを説いた。〕

鬼無里や戸隠の風光と諸行事は、感銘を呼ぶことが多かった。その一端を、次の詩に託したので、披露する。

*

長谷川 泉

鬼無里をたたえる

落葉松林や 杉木立

更には 樺林の

緑滴る 風情に加え

白樺林の 素肌の 清艶さよ

鬼無里を 満喫させる

川俣従道さんの 鮮やかな

ハンドルさばきと 巧な口説は

天来の妙音

水芭蕉の 爽麗期は 終っていたが

戸隠神社の お神楽も 巫女舞も

天紙風筆の 爽かさ

そして鬼女紅葉太鼓の

腹に響く 天地開明の迫力

松巖寺の 川端文学碑の

瞳目に値する巨岩も

ひっそり安らう川端文学碑のある

戸隠小学校横の

ひとつとの 姫小松の あえかさも

強く心に 刻まれた

あの川端文学碑よ 姫小松よ



講演中の著者



水芭蕉の群生地 奥は樺林

詩「鬼無里をたたえる」に寄せて

川俣 従道

川端文学研究会は、創立二十五年にあたる特別大会を、平成十年八月二十二日に長野県の鬼無里村と共催で開催した。

鬼無里は今から六十余年前の昭和十一年晩秋、川端康成が訪れた村である。

謡曲「紅葉狩」の女人、「紅葉」にまつわる伝承にひかれての訪問であった。

昭和五十六年六月には、村の有志三百人によって川端文学碑も松巖寺の境内に建立されている。

大会は、その松巖寺に近い村の「ふれあいセンター」に、三百人程の人々が集まって行なわれた。アトラクショ

ンには、毎年海外公演もしてきた「鬼女紅葉太鼓」が勇壮な響きを披露し、また翌二十三日には紅葉伝承の「内裏屋敷跡地」や、京文化の伝播を語る「山車」の陳列館等の見学後、「戸隠の巫女」に描かれている「巫女舞」を戸隠神社で拝観した。

さらに、昭和四十八年、戸隠小学校創立百年にあたって建立された「戸隠には古都のやうに美しい子供がゐる」という「牧歌」の一節を刻んだ文学碑を小学校々庭隅に見て、遠い日の文豪の足跡をしのんだのである。

詩「鬼無里をたたえる」は、会長の長谷川先生が、それら足跡をたどつての文学散歩に際し、目にされた鬼無里・戸隠の風光を詠まれたものである。

また鬼無里は、村の北端が越後と境を接し、丈余を越える日本の豪雪地帯で、そこに千古不餓のブナ・トチ・ナラ等、樹齢三百年をこえる原生林がしげり、その樹間の湿原には、八十万本を越え本邦第一といわれる水バショウの大群生地もあつて、毎年五月には観光客でにぎわっており、この一帯は日本の自然百選にもなっている奥裾花溪谷である。

逃走するエクリチュール

——『上海』『浅草紅団』のフラグメント性——

中村 三春

I 都市と文芸テキスト

いかなる批評理論にせよ、その表意内容を表意する原基が、ほかならぬ言葉であることに間違いはない。その意味で、対象における言葉の配置を見極めようとするテキスト分析は、これまでも、またこれからもあらゆる批評的言説の出発点となるはずである。テキスト論は終わらない——今回の課題に対して、この立場から些かの寄与を試みてみたい。

ここで参照の枠組みとするのは前田愛の『都市空間の

なかの文学¹⁾』である。この中には、今回の特集のテーマである「一九二〇年代の横光、川端」にふさわしい二編の論文、すなわち「SHANGHAI 1925」及び「劇場としての浅草」が収められている。同書の序論「空間のテキスト テキストの空間」から明らかなように、その方法的な手続きは、都市と文芸テキストとの間に写像の関係を認めることから始まる。その結果として、二編の論考では各々、「横光の『上海』は、上海という都市のテキストから切りだされたメタテキストであり、新感覚的な手法をぞんぶんに駆使して都市のテキストをもうひとつの

テキストに変換しようとした野心的な試みである」⁽²⁾、また『浅草紅団』は、劇場としての浅草、一九三〇年の劇場都市TOKIOを描いたものがたりなのだ⁽³⁾という記述が見られる。言うまでもなく『都市空間のなかの文学』は、主として作者の表現としてではなく「引用の織物」としてテキストを見、様々な文化的コードの集積体として文芸を読み直す論拠を与えてくれた書物である。その限りにおいて、代表的なテキスト分析の実践の成果として、高い水準を示している。

ところで、それらの文化的コードの主要な引用元として、勿論、前田は都市というテキストを指定する。その写像の方程式は単純ではないとはいえ、都市からテキストへの写像が論の中心をなすわけである。『上海』論では共同租界の実態と五・三〇事件の歴史的記述を、また『浅草紅団』論では現代の浅草と当時の浅草との地誌的・風俗史的概括を枕に置くことから、各々の論文は書き出されるのである。実際、横光は改造社版『上海』（昭7・7）の「序」に、このテキストが題材としたのは五・三〇事件であると明言し、「私は出来得る限り歴史的事実に

忠実に近づいたつもりではあるが」云々と述べている。川端もまた『浅草紅団』続稿予告（『文芸』昭9・7）では、「浅草の見聞記、印象記として、恐らくこの作品は不滅であらうと考へてゐる」とする。「歴史的事実」や「見聞記、印象記」としてのテキストという作者たちの発言と、前田の方法とは合致しているように思われる。特に『浅草紅団』について、その主役は特定の人物や人物群ではなく、浅草という空間にほかならない、という論者が多く現れる所以である。

確かに、これらが実在の都市と関連のあるテキストであるというのは疑いもないだろう。この二つを並べて論じるのも、それが根本にある。しかし、根元的に虚構論的な見方からすれば、言葉は、都市を忠実に再現するなどできはしない。言葉は一般に対象を指示したり、何かを意味したりすることができ、ある対象をどのよう⁽⁴⁾に語るのかの仕方は、およそ無数にある。ラッセルは、「外延から内包的意味に戻る道はない」と断言する。言い換えれば、言葉は情報を取捨選択し、独自のヴァージョンで語るものであって、その際に捨てられる部分、新たに